

Question

1

1 学級の人数を減らせば  
学力は向上するのだろうか

Answer

人数による違いは大きくない  
小2～中3は35人規模までの学級で差が少ない

「学級の人数」は何人が最適か

「学級の人数を減らす」ということが、学力向上や不登校・学級崩壊の予防を進める具体策として議論されています。現在、日本では40人学級が一般的ですが、この学級人数は、世界的にみても韓国とともに非常に多いということが理由の一つです (P.27参考データ参照)。

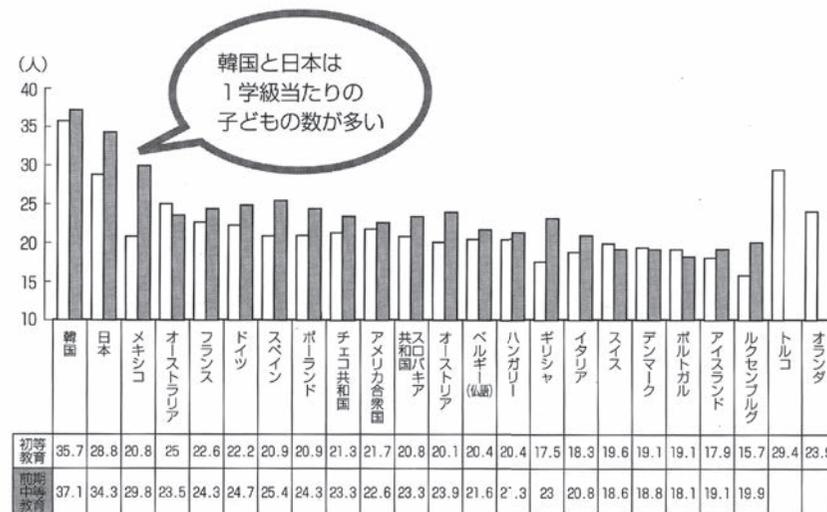
実際に、少人数学級や少人数指導を導入する自治体が増え、30人・33人・35人学級を実施する県や市町村も出てきました。導入の根拠には、「少人数にすれば、きめ細かな指導ができ、子どもたちの学級適応や学力は向上するだろう」とする考え方があります。

しかし、ここで素朴な疑問がわきます。学級の人数は、少なければ少ないほどよいというものなのでしょうか。

そもそも、学級が何人だと学力がいつそう定着し、学級が何人だと学校教育の質が向上するのでしょうか。

実は、学級人数を減らすことが学校教育の問題解決につながるという実証的な根拠は多くはありません。そこで、今後、各自治体が少

参考 Data 平均学級規模の国際比較 (2002年OECD調査)



文部科学省ホームページ「2004年版 図表でみる教育」より

人数学級を取り入れるうえでの参考となるように、1学級当たりの人数別にデータを分析してみました。

少人数制を望む教師と、望まない子どもたち

これまでの文部科学省による調査では、小中学生と保護者・一般教員では、少人数制に対する意識のズレが大きいことがわかっています。

「クラスの人数をもっと少なくしてほしいか」という質問に、「賛成」「まあ賛成」と答えた小学生は20.6%、中学生は25.6%なのに対し、保護者は69.0%、一般教員は95.3%でした (文部科学省「義務教育に関する意識調査」2005年)。

このほかの調査では、「小中学校の教員が理想的だと考える1クラスの児童生徒数は、21～25人である」（山崎博敏，2005），という報告もあります。

つまり，少人数制への希望は，おもに大人の側に強いようです。

本書では，子どもの回答をもとに，校種別に，学力の定着度・学級生活満足度・学習意欲という観点で学級人数の効果を分析しました。

### 小学校2～3年生の調査結果を読む

#### ○学級生活の満足度に違いはない

小学校低学年の学級生活の満足度は，1学級が26～30人のときが，ほかよりも良好です。満足度の高い子どもの割合が最も多く，不満足の子どもの割合が最も少ないのです。しかしこの結果からは，学級の数によってはっきりした差があるとはいえません。

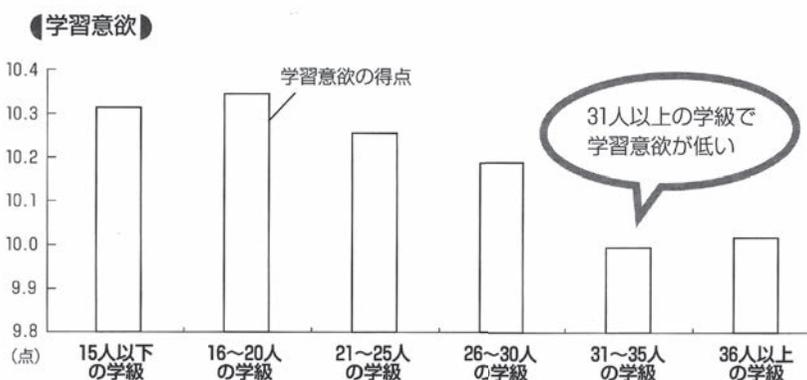
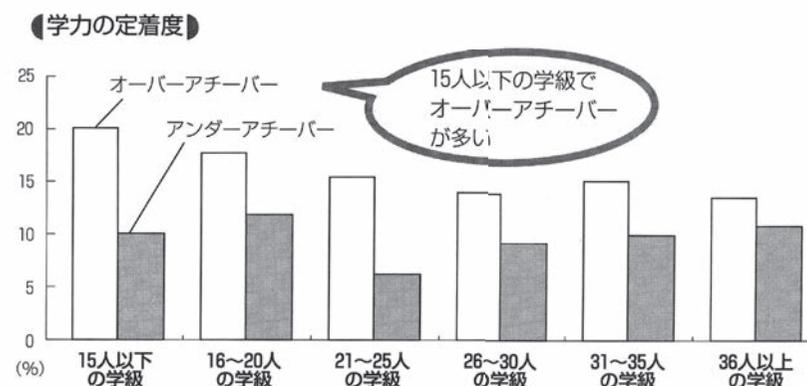
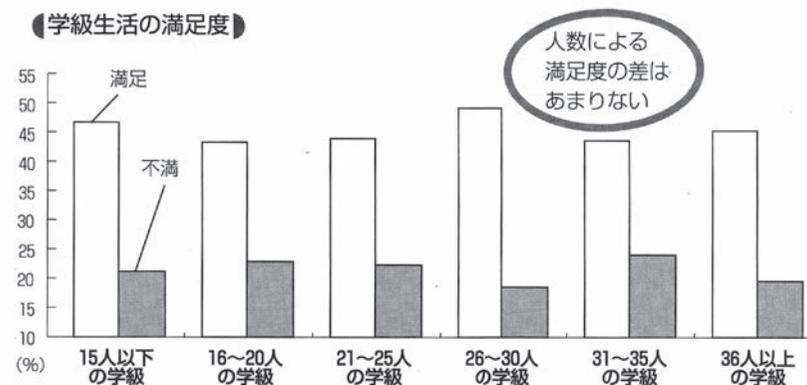
#### ○学力の定着度は15人以下で高い

1学級15人以下のとき，学力の定着度の高い児童（オーバーアチーバー：OA）が多くなっています。学力の定着度の低い児童（アンダーアチーバー：UA）の出現率には差は認められません。36人以上で低下傾向にあると読み取れます。

#### ○学習意欲は31人以上で低下

学習意欲は，26～30人以下の学級が，相対的に高いといえます。これが31人以上になると低下する傾向がみられます。

### Data1 小学校2～3年生の学級規模による比較



## 小学校4～6年生の調査結果を読む

### ○学級生活の満足度に違いはない

4～6年生の学級生活の満足度は低学年とほぼ同じ。学級の人数によって顕著な差はみられません。

### ○学力の定着度は15人以下で高く定着

1学級15人以下のとき、学力の定着度の高い児童（OA）が多くなっています。1学級36人以上になると、全体的に学力の定着度が低下する傾向がみられます。

### ○学習意欲は36人以上で低下

高学年の学習意欲は、1学級36人以上になると、全体的に低下する傾向がみられます。ただし35人よりも少ないほどよいかといえ、それはいえません。

## 小学生全体の特徴

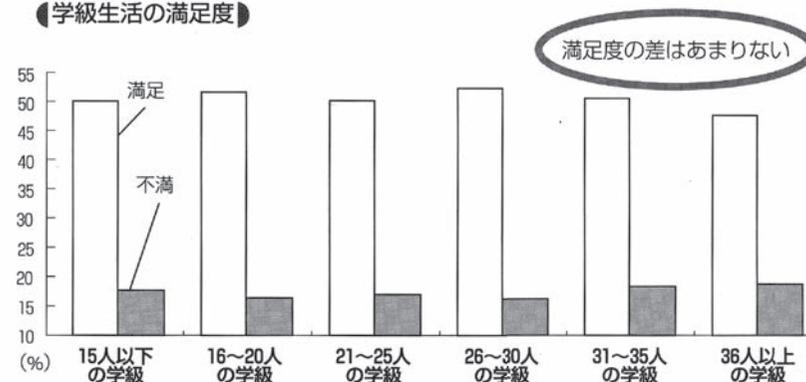
小学生の結果を総合すると、学級生活満足度は26～30人のときのみ相対的に良好ですが、それ以下の人数でも、それ以上の人数でも、たいした差は認められませんでした。また、常に1学級を26～30人にそろえることは、学校現場では現実的に無理があるでしょう。

学力の定着や学習意欲からみると、1学級36人以上のときに、学力の定着も学習意欲も全体的に低下する傾向があります。

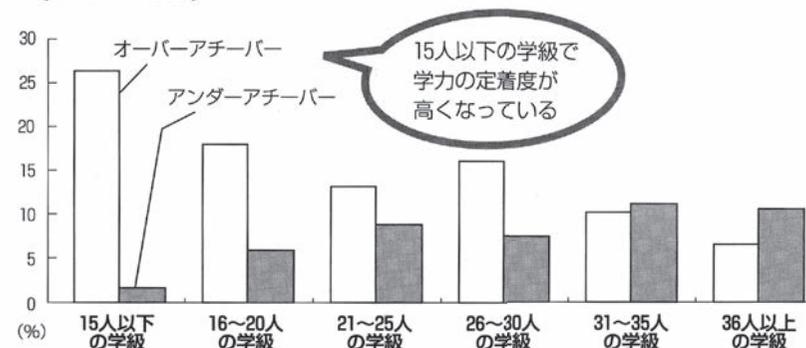
また、1学級15人以下のとき、学力がよく定着している（OA）子どもの出現率が高いことも見過ごせません。

## Data 2 小学校4～6年生の学級規模による比較

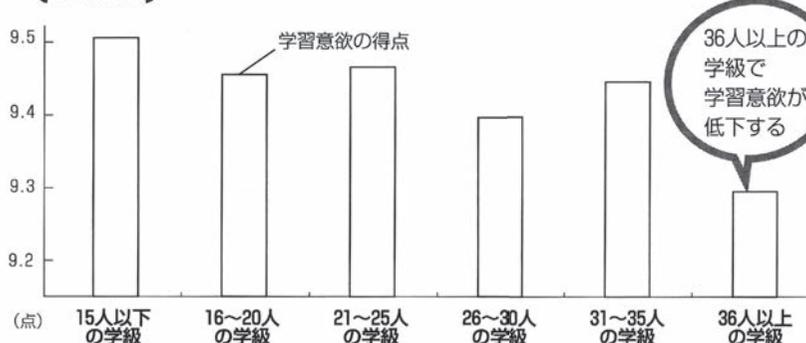
### 【学級生活の満足度】



### 【学力の定着度】



### 【学習意欲】



## 中学校1～3年生の調査結果を読む

### ○学級生活の満足度は26～30人で最も良好

1学級が26～30人のときが最も良好です。学級生活の満足度の高い生徒の割合が最も多く、かつ不満足な生徒の割合が最も少なくなります。15人より少なくなったとき、良好さは低下します。

### ○学力の定着度は26～35人がよい

1学級が25人以下になると、学力の定着度の低い生徒（UA）の出現率が低くなります。また、1学級が36人以上になると学力の定着度の低い生徒（UA）の出現率が高くなります。

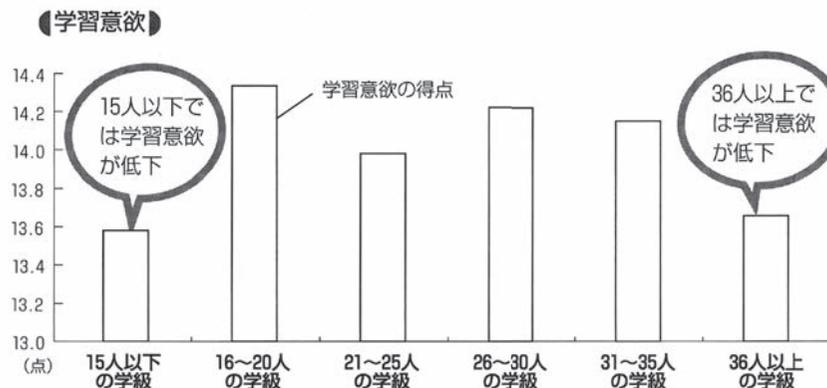
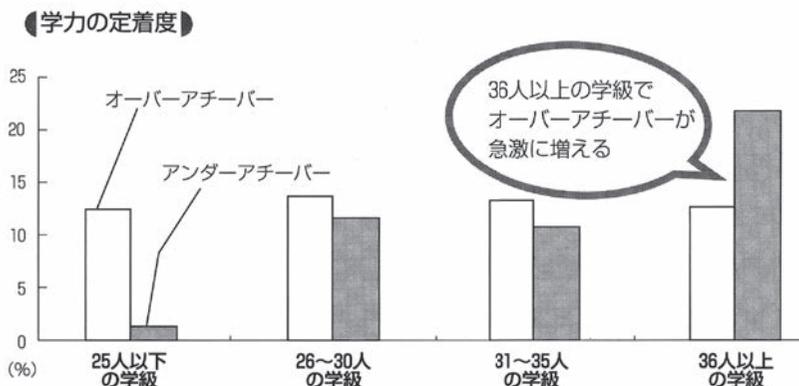
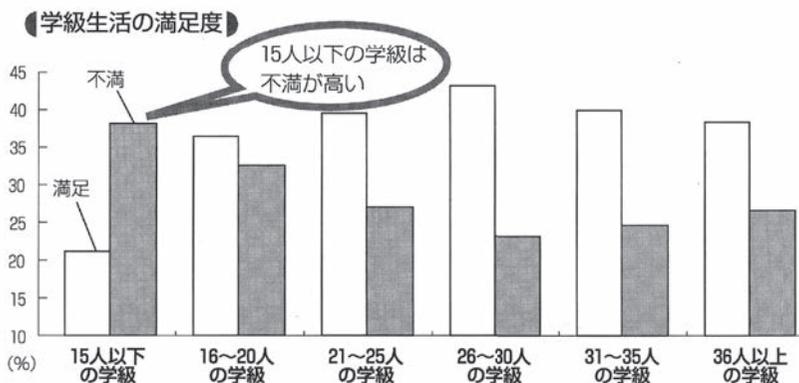
### ○学習意欲は人数が多くても少なくとも低くなる

36人以上と15人以下のとき、学習意欲が低下します。

#### 【用語解説】

- ・学力の定着度が高い（OA）：オーバーアチーバー。  
高い学習意欲、良好な学習環境、効果的な学習方法の活用などによって、学習したことがよく身についていると判断される状態。
- ・学力の定着度が低い（UA）：アンダーアチーバー。  
何らかの要因で、学習が身につけていないと判断される状態。
- ・バランスアチーバー（BA）：現在もっている学習基礎能力相応の学力が定着していると判断される状態。

### Data 3 中学校の学級規模による比較



## 学級の人数と学力はある程度関係している

学級の人数を減らすことは、子どもたちの「学力の定着」「学習意欲」に、ある程度の関係をもつことがわかりました。各自治体で行われている少人数学級の推進は、この点において有効性が認められるといえます。

### ○小学校は30～35人規模で、学習活動は15人以下も検討したい

小学校2～6年生で学級の人数を少なくする場合、理想としては26～30人規模の学級がよいようです。学力の定着と学習意欲の高さを重視するのならば、35人規模の学級も十分に効果があるといえます。授業などの学習活動では、15人以下の少人数指導の工夫を検討する価値があるでしょう。なお小学1年生については、全体とは顕著な違いが表れたので、36ページで詳しく述べます。

### ○中学校では35人規模で、少なすぎに注意

中学校で学級の人数を減らす場合、学習意欲の高さと学力の定着を重視するのなら、35人規模の学級で十分だといえます。学習活動では、16～25人の少人数指導の工夫も検討する価値があります。ただし、学級規模が15人以下になると、学級生活満足度、学習意欲ともに低下します。少なすぎるデメリットに配慮する必要があります。

## 学級規模は35人で十分

学級の人数をどのくらいまで減らせばよいかということについて、全体の結果を大枠でまとめると、「学級の人数が多すぎなければ、だ

いたい同じような成果が生じる」といえることがいえます。

日本の現状が40人学級であることを踏まえると、現実性の高い35人規模でよしとする判断ができると私はみています。

30人規模の学級も効果が高いといえるのですが、データを集積して30人と35人を比べていくと、優劣は項目によってまちまちだったり、差があっても小さかったりしています。

そこで私は、今回の調査結果を総合して、「小学2年生～中学3年生では、上限を35人規模の学級とすればよい」と結論づけます。

少人数学級の推進で、「35人だ」「33人だ」とわずかな差にこだわっている場合がありますが、むしろ学級規模は35人でよしとして、もっと効果の見込める解決策を検討することが大切だといえます。

## 学級状態がより重要

学級の人数を減らすことがある程度の効果をもつことはわかりましたが、その違いは、決定的とまではいえません。そこで私は、学力とその他の要素を組み合わせた分析もいろいろ試みました。

そのなかで、学力との相関がいちばん大きかった要素が、「学級集団の状態」でした。P.40～43で紹介しますが、学力の定着と学習意欲に対して、「学級の人数」よりもとても強い関係をもっています。

子どもたちの学級生活満足度が高い学級は、いじめ・不登校などの不適応を予防するだけでなく、学力の定着や意欲に対しても大きな影響を及ぼすと考えられます。学級の人数を何人にするだけでなく、子どもたちが所属する学級集団の質や、その背景にある教師の指導や援助のあり方を改善することがとても有効だといえるでしょう。

Question

2

小1プロブレム・中1プロブレムには  
学級人数を減らすと効果があるか

Answer

小学校1年生は15人、中学校1年生は35人でよい  
人数以外の要因が疑われる

1年生で起こる不適応

少人数学級の導入を、いわゆる「小1プロブレム」「中1プロブレム」への対応として行う地域がみられます。子どもたちの学校環境が大きく変わる小学校1年生、中学校1年生に、特にきめ細かく対応を行うのがねらいのようです。

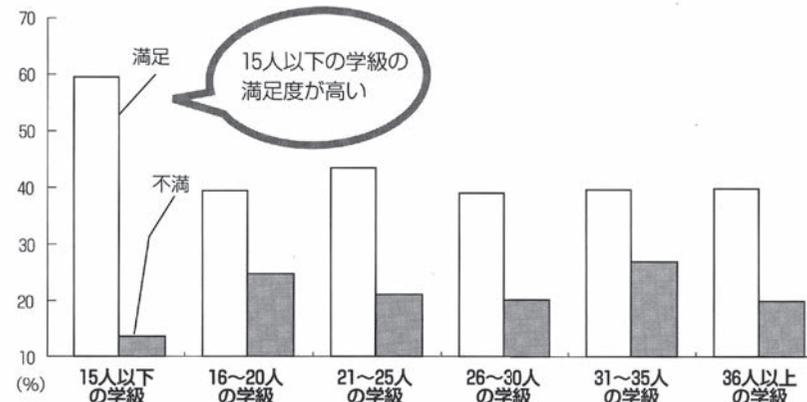
そこで、小学校1年生、中学校1年生だけのデータを今回の調査結果から抽出し、学級の数と学習意欲、学級の数と学級生活満足度についての関係性を調べてみました。

小学校1年生は15人が有効。20人も可

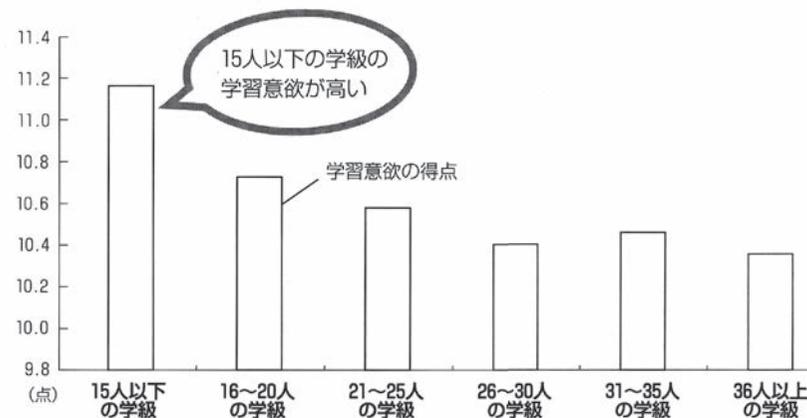
小学校1年生の学級生活の満足度は、学級人数が15人以下の児童たちが最も良好です。満足度の高い児童の割合が最も多く、不適応状態やいじめ被害の可能性が高くなる不満足な児童の割合が最も少なくなります。

Data 4 小学校1年生の学級規模による比較

学級生活の満足度



学習意欲



学力の定着度

学力の定着度を判定するQ-U, NRT, サポートという3つの検査にあわせてご協力いただいた学級をみると、学級人数の分布に不自然なバラツキがありました。したがって、分析結果は今回公表することを差し控えます。ちなみに、1学級が36人以上の学級のデータが少なかったです。

また学習意欲でも、学級人数が15人以下の児童たちが最も高く、これよりも1学級の人数が増えると学習意欲は低下します。

以上の結論から、小学校1年生では15人規模の学級が有効だと考えられます。それ以外の25人、30人、35人規模の学級を選択することは、本研究結果から考えると根拠が乏しいでしょう。

### 中学校1年生は人数の影響が小さい

中学校1年生は、学級生活満足度においても学習意欲においても、中学校2～3年生とほぼ同様の結果が認められました (Data5)。

中学校1年生の満足度は、1学級が26～30人のときに最も良好です。満足度の高い生徒の割合が最も多く、かつ、不満足な生徒の割合が最も少なくなります。いっぽう15人以下になると、満足度が大きく低下するとともに、不満をもつ生徒が増加します。

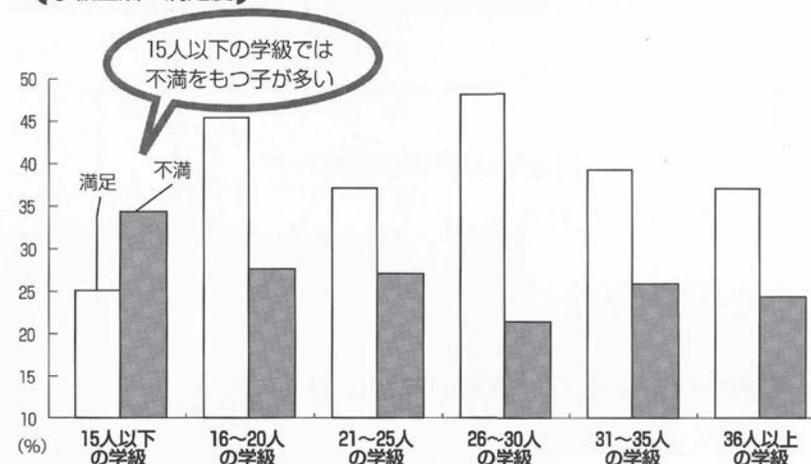
学習意欲は、1学級が36人以上、または15人以下になると低下します。それ以外の人数では違いはないとみていいでしょう。

中学校1年生は、不登校の出現率が高くなる時期です (P.57参照)。そこで本研究でも、中学校1年生と、2年生・3年生を比べて検討しましたが、学級生活満足度や学習意欲については、1学級の人数に関する差が認められませんでした。

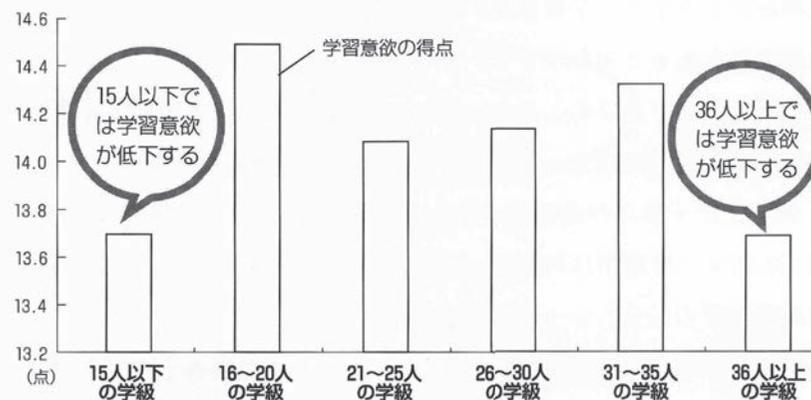
ただし、本調査は2学期に行ったものであり、一般的に2学期に入ると不登校の生徒が増えることを考慮すると、不登校の生徒たちの回答が欠けていることが予想されます。この点をふまえた、さらなる調査が必要だといえるでしょう。

### Data 5 中学校1年生の学級規模による比較

#### 学級生活の満足度



#### 学習意欲



#### 学力の定着度

学力の定着度を判定するQ-U, NRT, サポートという3つの検査にあわせてご協力いただいた学級をみると、学級人数の分布に不自然なバラツキがありました。したがって、分析結果は今回公表することを差し控えます。ちなみに、1学級が25人以下の学級のデータが少なかったです。

Question

3

## 学級集団の状態によって 学力差は生じるか

Answer

YES! 満足型の学級集団の  
学力の伸びがいい

### 学級状態によって、学力の伸びに差

ここでは、学力の定着度や学習意欲と「学級集団の状態」に関連した検証を進めます。学級集団の状態は、学級崩壊やいじめ防止の大きな要因にもなると思われます。

さて、右のグラフのとおり、「学力の定着度」は、満足型・管理型・なれあい型の学級によって大きな差があることがわかります。

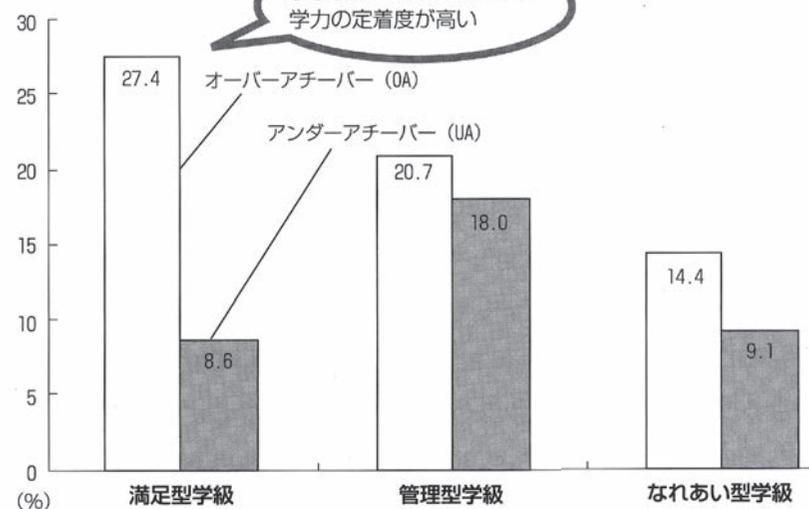
小学校で「学力の定着度が高い(OA)」子どもの出現率は、満足型で約27%、管理型は約20%、なれあい型は約14%でした。なれあい型は満足型の半分ということになります。

次に、「学力の定着度が低い(UA)」子どもの出現率をみると、満足型となれあい型はともに約9%に対して、管理型は18%。つまり、管理型の学級では、学力の定着が低い子どもの割合は、満足型となれあい型のおよそ2倍いるということになります。

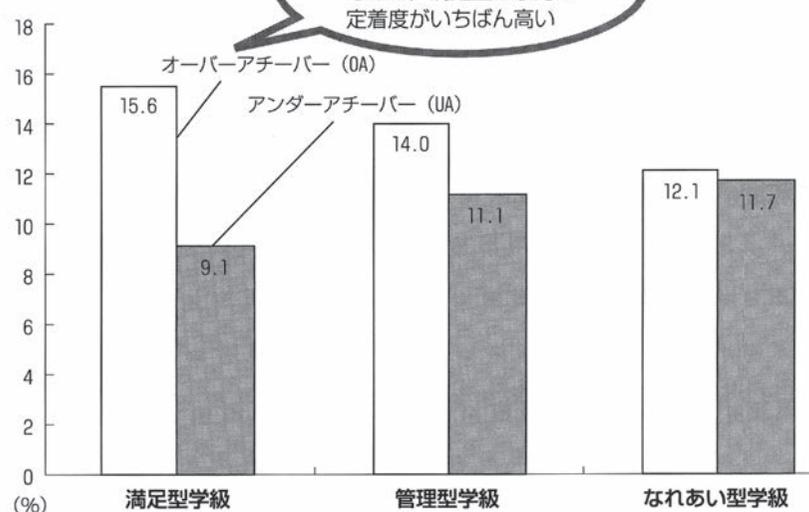
中学校では小学校ほどの差はありませんが、満足型はOAの割合が管理型となれあい型よりも高く、UAは両者よりも低くなっています。

### Data 6 学級集団と学力

【小学校】



【中学校】



## 伸びにくいなれあい型

小中ともに、最も学力の定着度が低いのはなれあい型です。

なれあい型では、学力の定着度が低い子どもはやや少ないものの、定着度の高い子どもの出現率が、満足型の約半分です。

なれあい型の授業は、一見自由で和気あいあいとした感じですが、私語が多いなど、勉強に集中していない様子がみられます。また、イベントなどの楽しみは共有するものの、互いに高め合い切磋琢磨する方向にはなかなか向かいません。このような学級の雰囲気が、学力の定着度が高まらない要因になっていると推測されます。

## 差が大きい管理型

管理型の特徴としては、「格差の広がり」があげられます。

小学校の管理型の結果をみると、学力の定着度が上がっている子どもが約20%いるのに対して、学力の定着度が低下している子どもも約18%で、両者が拮抗しています。

学力が低下している子どもの割合は、満足型に比べて約2倍であるということを考えあわせると、管理型は、「できる子とできない子の差に開きがある」学級だといえるでしょう。

## ぐんぐん伸びる満足型

学力がより身につく可能性が高い学級は、満足型だといえます。

なれあい型と管理型に比べて、満足型では、学力の定着度が高い子どもの割合が多く、逆に学力の定着度が低い子どもの割合は少ないという結果が出ています。

満足型の学級は、共に生活し人間的なかわりをもつうえでの規範（ルール）と、親しい人間関係（リレーション）が育っているため、互いに活発にかかわり合うことができるのです。

すると以下のように、子ども同士が磨き合う相互作用が生じます。

- ①みんなとかかわる中で、学習意欲が喚起される。
- ②互いを認め合うことができるので、学習意欲が持続する。
- ③友達のいい学習方法をモデルにして取り入れることができる。
- ④主体的な学習習慣が形成され、学習活動に広がりや深まりが起これ、学習が定着する。

学習という視点からみても、満足型は、互いに学び合い高め合う、教育力のある学級集団であるといえるでしょう。

## 学力を伸ばすには学級づくり

子どもたちの「学級生活の満足度」に対して、1学級あたりの人数の違いによる影響はほとんどありませんでした。学級集団の状態や雰囲気、学級内の人間関係、教師との関係が上記の①～④のように作用して、学級生活の満足度により大きく影響するものと考えられます。

学力の伸びる学習集団をつくるためには、子どもたちが所属する学級集団の質、その背景となる教師の学級経営や指導や援助のあり方を検討することが有効であると考えられます。

Question

4

静かに学習が行われている管理型学級では、  
学習意欲も高いか

Answer

熱心に取り組んでいるように見えるが  
ほかと変わらない

### 管理型で学習意欲が伸びるわけではない

管理型学級の授業では、子どもたちは静かに教師の話を聞き、熱心に学習に取り組んでいる様子がみられます。このような学級の様子は、一般により評価をされることが多いようです。

このような管理型の学級では、子どもの学習意欲が高く、自ら積極的に学習に取り組んでいるといえるのでしょうか。この問いに対して、そうとはいえない実情を調査結果は示しています。

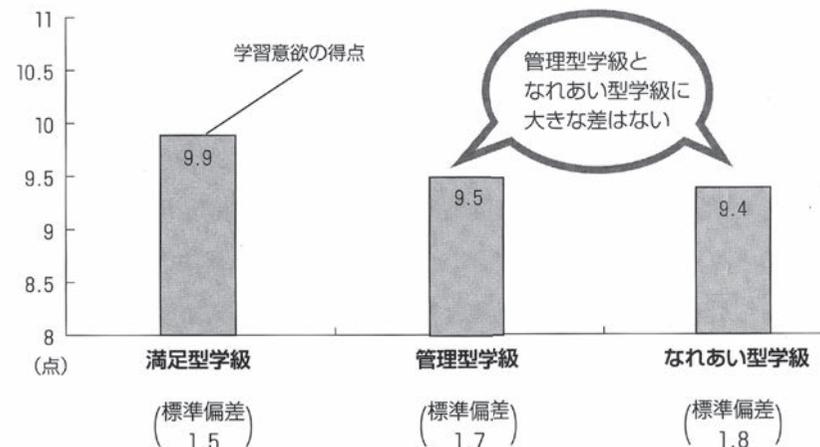
子どもの意欲を調べる尺度（スクールモラールテスト：SMT）の、学習意欲得点の平均値をみると、小学校では満足型がいちばん高く、管理型となれあい型は満足型よりも低く、ほぼ同程度という結果でした。

授業中に私語が目立ち、騒がしい傾向のなれあい型と、粛々と授業の進む管理型の子どもたちで、学習意欲の差はみられませんでした。

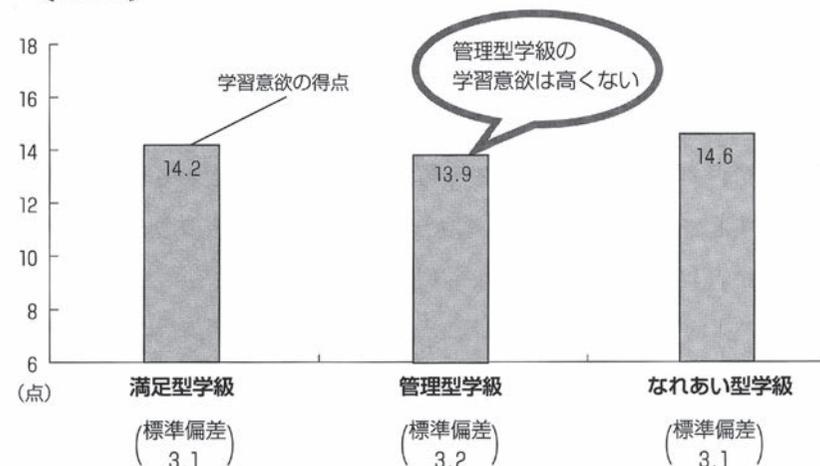
次に中学校をみてみると、満足型・管理型・なれ合い型で大きな違いはみられませんでした。

### Data7 学級タイプ別 子どもの学習意欲

【小学校】



【中学校】



## 内面化がむずかしい管理型学級

小学校の管理型学級では、教師が「授業中の私語は厳禁」といったルールを学級内に徹底しているの、肅々と授業は進みます。意欲が高くないにもかかわらず、このような授業が成立する背景には、子どもたちのほうで「先生がうるさいから、授業中は静かにしておこう」と、おとなしくしているのだという実態が考えられます。70ページで述べる、管理型学級の規範意識と同じ構造です。

授業を見たときに、「静かで秩序ある授業だから、子どもたちが積極的・自発的に学習に取り組んでいる」とは、必ずしもいえないということです。

いっぽう中学校では、学級タイプによる学習意欲の平均値にほとんど差はなく、管理型が特に低いとはいえませんが、標準偏差では管理型が最も大きくなっています。ほかの学級と平均値では同じになっているのですが、管理型では「子どもたちの学習意欲にバラツキが大きく、高低の差が激しい」ということを示しています。

43ページで述べた相互作用のうら「①みんなとかかわる中で、学習意欲が喚起される」「②互いを認め合うことができるので、学習意欲が持続する」がうまく作用しないのでしょうか。

## 小学校のなれあい型は、学習意欲にバラツキが

小学校のなれあい型と管理型は、学習意欲の平均値がほぼ同じです。しかし、標準偏差は管理型よりも値が大きく、子どもたちの得点

に大きなバラツキがあることがわかります。小学校のなれあい型は、「学習意欲の高い子と低い子の差が大きい」といえます。

43ページで述べた相互作用のうち、「③友達のいい学習方法をモデルにして取り入れる」「④主体的な学習習慣が形成され、学習活動に広がりや深まりが起これば学習が定着する」がうまく作用しないのでしょうか。

いっぽう中学校では、満足型・管理型・なれあい型の学級タイプによる平均値の差はほとんどありませんが、僅差ながらなれあい型の学習意欲がいちばん高くなっています。

私の推測になりますが、中学校のなれあい型の学級では、一部の授業で、枠にはまらず、わりと自由に学習できるという学習形態が許容されており、それが学習意欲に結びつく要因となっているのではないかと思われます。

## 学習意欲も高い満足型

学習意欲の平均値が高く、標準偏差が小さかった学級は満足型です。これは、子どもたちの学習意欲にバラツキが少なく、平均して高い傾向にあることを示します。また、42ページで示したとおり、満足型学級では、子どもの学力の定着度も高くなっています。

学級全体の人間関係が良好な満足型は、みんなとかかわる中で、よい相互作用が起き、互いに高め合いが起きているのでしょうか。

満足型の学級は、いじめ・不登校などの不適応が起これにくいだけでなく、学力の定着度や学習意欲にもよい影響を与えることがわかります。

## 提言

まずは「学級集団」  
という重要な学習環境を整える

## まず学級環境から

学力問題というと、「個人」のあるいは「測れる」側面を高めるための方策に関してばかり、さまざまなことがいわれます。

教える内容を増やすべきだとか、授業時数を増やそうとか、教える内容のレベルを上げたらよいのだとか、教えたことをテストでフォローするべきだなどです。

しかし、教育の問題を考えると、われわれが議論をするべきは、「何をするか」だけでなく、学校の中で「どのように教えるのか」ということではないでしょうか。子どもにどのように接し、どのように学習させたら学力を伸ばすことができるのか。その要素と条件を整備していくことがスタートになると思います。

このように考えると、まず最初にすべきことは、「子どもがよりよく学べる学習環境を整えること」だと思います。そしてその最も重要な環境が学習集団としての学級であると思います。

## 学力向上には満足型学級

日本の学校は、学習集団イコール生活集団だということに特徴があ

ります。「学級」という生活集団を基底にして授業が行われるため、生活集団としての学級と、学習集団としての学級は、常に影響を与え合っているのです。

そこで「学級の人数をどうしたらよいか」という問いが生まれるのですが、今回の調査結果からいえることは、35人が望ましいものの、学級人数による違いはそれほど大きくはないということです。むしろ学級集団の状態が学力定着度と関係のあることもわかりました。

本章の結論としては、「学力向上には、生活環境でもあり学習環境でもある学級の状態をよくすることが優先課題である」ということにつきます。

現在、学級を単位にして行われる教育活動には、児童生徒の不応の対応から予防、さらに生きる力につながる開発的な取組み、そして学力の向上と、求められる期待がどんどん大きくなっています。

## 授業内容と学級状態との相性を考える

学級という学習環境が整備できたら、次は、教える内容（授業）をどのように工夫するかということになります。

どんなにハードを向上させても、それに見合ったソフトが動かなければ成果は表れません。反対に、どんなによいソフトがあっても、ハードの環境がそれに見合わなければ、効果を発揮できません。どのようなハードとソフトの組み合わせが有効か、より広く実証的に検討していくことが、いま求められていると思います。

具体的には、カリキュラムの開発や教材・設備の充実と並行して、それをどのような学校（学級）で、どのように実施したら効果が出た

かというエビデンスを蓄積することです。

例えば管理型の学級では、教師による講義型の授業だけでなく、2～4人の協同学習や相互評価を取り入れる。なれあい型の学級では、5～10分と短く区切って、全員が集中して静かに問題に取り組む時間を入れていくなどです。

そのためには、教育政策を投げるだけでなく、実行する学校現場の知恵や力量を上手に引き出すことが必要です。そして、十分に実行できるだけの余裕を学校に与える必要があります。

## ||| 学習への考え方も影響

本書で取り上げていませんが、学習意欲や学力の定着度に関しては、個々の子どもがもっている気質や、保護者の思いをどのように反映しているかなどの影響が大きいことがわかっています。

例えば、「勉強はしっかりやるものだ」「学歴社会なんだから、いい企業に入るためにはいま勉強しなくては」といった考え方を保護者がもっている場合、素直にその考え方を取り込んでよく勉強する子どももいれば、反発して勉強以外のことに熱心に取り組む子どももいます。

また、「勉強したって、たかがしれている」「がんばったところで仕方がない」といった、いまの日本の社会に漂う空気感の影響を受けている子どももいるでしょう。

個々の子どもがもっている学習に対する考え方の差が、学力に影響することも見逃せない事実です。